

# 金剛寶戒寺便り

<http://www.houkaiji.jp>

令和元年六月一日発行 第六十三号

檀信徒の皆さま、こんにちは。暦の上では初夏となり、紫陽花も小さなつぼみが色づきはじめました。中庭の池のフナはこれから一日ごとに大きくなっていきます。

五月の講習会ではゆふみ病院より堺千代看護師長さんをお招きして「ホスピス緩和ケアで出来る事」と題してお話を頂きました。

ホスピスは終末期医療を行う病院（病棟）とのイメージから、一度入院をすると、退院することは無いと思われがちですが、決してそのようなことは無く、心身ともに体調が良くなれば退院して通院に切り替わるというケースも少なくないそうです。また対象となる患者さんは悪性腫瘍の患者さんのみで、本人と家族が入院を希望している事が原則となり、入院予約時に病名と病状を理解している必要が有ります。ただし、医師から余命の宣告等をされていたとしても、その詳細を本人が知っている必要は無いそうです。それは余命宣告と寿命は別であること。特に終末期では心と身体のバランスが重要であり、心前向きな患者さんほど、医師も驚くほどの寿命となることを経験から知っているからです。

また入院の手続きとしては、患者さん本人や家族との面談や診察を行い、病院側が病状などを把握した上でスタッフ会議を開き、入

院へと至るそうです。その段階で抗がん剤治療や科学的治療を行っている患者さんは入院の対象とならないという事を今回初めて知りました。

ホスピスケアの目的は患者さんの徹底的な苦痛の緩和、日常生活の援助。心理的・社会的・スピリチュアルケアを含む全人的ケアだけでなく家族へのサポートもその一環となります。家での生活となるべく変わりが無いように、二十四時間いつでも面会が出来、お孫さんやペットと触れ合う事も可能だそうです。畑仕事をしていた人は、プランターで野菜栽培や花づくりをすることも可能だそうです。

（ゆふみ病院ホームページ参照）

寿命百年時代とも言われ、終末期にも様々な選択があります。私は父の最期を自宅で見取ったので、自分も在宅が良いかと思っていきましたが、病院と在宅の中間に位置するようなホスピス病棟での最期も良いなと思ったのが正直な感想です。また少しだけ死への恐怖が少なくなったようにも実感しました。次の機会には医院長先生にもお話をお願いしてみたいと思っています。

しばらくは雨とのお付き合いになりますが、梅雨が明けると夏本番、お盆も近づいてまいります。七月の講習会ではお盆供養のルーツでもあるお施餓鬼供養について住職がお話をさせて頂きます。餓鬼供養の由来からその功德や効験などをお伝えしたいと思います。

日時 七月八日（月曜日）午後二時より  
演題 「施餓鬼供養の由来と功德」  
当山住職がお話をさせて頂きます。

五月二十一日には総代会議を開き、昨年度の事業報告やお墓の管理費、納骨堂の申し込み状況などをお伝えいたしました。その中で篤信者 小橋昭子様による舗装工事のご希望があることを議題に上げ、総代様のご意見を伺いましたが、賛同を得ましたので舗装工事をお願いする運びとなりました事を皆様にも紙面にてお伝えいたします。

工事の区間は門前のコンクリート舗装をしている参道からお墓の階段前までと、大日堂南側の駐車場全部です。工事の期日などはまだ決まっていませんが、三週間程度の工事期間を予定しています。その間も徒歩での出入りは可能ですが、車の乗り入れは出来ませんのでご理解、ご協力をお願い致します。お寺の外観は壊れない様に人工的には見えにくい脱色した透水性のあるアスファルト舗装を予定しています。工事が終わりましたら石などにつまづくことも無く歩きやすくなると思っています。

小橋様の大変ありがたいお申し入れに感謝申し上げますと共に、総代様からも、建設的なご意見を頂きました。金剛宝戒寺は皆さまに温かく支えられている事を実感しております。心から御礼申し上げます。

合掌